

---

## 吉岡康暢さんの歴博時代

春 成 秀 爾

---

本館考古研究部教授の吉岡康暢さんが、本年3月に停年で去ることになった。

吉岡さんは、考古研究部生産遺跡研究部門の教授として1985年4月に着任したから、歴博時代は15年間であった。

歴博では、特定研究「在来技術の伝統と継承」(1987～93年度)の代表者を7年間にわたって務め、館内外の研究者と共同で製鉄技術の理化学的研究をすすめ、藤尾慎一郎さんの助力を得て大量の鉄滓・鉄器の分析・調査結果を公表した(「日本・韓国の鉄生産技術」『国立歴史民俗博物館研究報告』第58・59集, 1994年)。1991～93年度の共同研究「中世食文化の総合的研究」でも代表者を務め、食器・食事から文化・社会を追究した成果を大部な報告書にまとめた(「中世食文化の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集, 1997年)。全国多数の研究者の協力を得て中・近世考古学の編年の基準となる紀年銘をもつ土器・陶磁器の集成作業にも取り組み、まず「近世窯業遺跡データ集成」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第73集, 1997年)をまとめ、「国産紀年銘土器・陶磁器データ集成」は原稿が完成し、来年度に刊行の予定となっている。

歴博の特別企画展「陶磁器の文化史」(1998年)では展示代表者となり、本館と名古屋市博物館で開催を実現した。

吉岡さんは、石川県で遺跡・遺物に則して縄文時代から中世まで幅広く実証的な研究をすすめる堅実な研究者として、早くから、石川県にこの人ありと知られていた人であった。とくに「加賀能登の古式土師器」(1962年)は、古墳時代前期の土器の実態をまとめた貴重な報告であったし、「石川県下野遺跡の研究」(1971年)も、北陸の縄文時代晩期の文化について総括した基本文献としてよく活用されたものであった。また、1985年に小山富士夫記念賞を受賞したのは、珠洲焼を代表とする日本海域の中世陶器の研究業績に対してであった。歴博に来る前の石川県立郷土資料館時代(1967～1985年)以来の土器・陶磁器の研究は、『日本海域の土器・陶磁 [中世編]』・『日本海域の土器・陶磁 [古代編]』として歴博時代にまとめた。

歴博に来てから吉岡さんは、北海道から沖縄まで1人の目で見ることができるようになり、調査地は全国的に広がり、さらにはアジアまで視野にいれた中世考古学の研究に専念した。なかでも、中世の陶磁器の生産と流通を主な研究テーマにえらび、吉岡さんが好んで使

---

う言葉を借りれば、「社会史」的な視点からその研究をすすめた。中世考古学といっても、文献が豊富に存在する時代であるから、文献を抜きにしての研究はありえない。吉岡さんは、考古資料を丹念に集めて分析する一方、文献にもよく目を通し、援用した。大学で日本史を専攻し文献に慣れ親しんでいたこと、学生時代以来の親しい学友に文献史の浅香年木さんがいたことが、吉岡さんの生涯の学問の方向と性格を決めたといえる。

織田信長は臣下に土地を与える代わりに茶壺を与えている。「威信財」としての陶磁器である。その一方、民衆にとっては、土器・陶磁器は煮炊きや食事にかかわる生活用具である。特別企画展「陶磁器の文化史」は、陶磁器からみた社会史として「威信財」としての陶磁器と生活用具としての陶磁器とを統一的に把握し、きれいなものは美術史、きたないものは考古学という戦前からのジャンル分けの伝統をうち破ろうとする野心的な試みであった。

吉岡さんの陶磁器研究にたいする視点と方法は、歴博の大学院セミナーでの講義「歴史資料としての陶磁器」(『考古資料と歴史学』1999年)に、研究史と現状を分析しながら詳しく述べている。その最後は、「考古資料が提起した東日本の自立性・主導性を、生活史から国家論をも射程に入れた、列島中世史の再構成がまたれる」の言葉でしめくくっている。それは自らに課した構想なのであろう。

中世考古学は、この20年間に長足の進歩をとげたが、吉岡さんはつねに先頭集団の中を走っていた。松任市教育委員会が主催した発掘調査の報告書の共編者となった『東大寺領横江庄遺跡』Ⅱ(1997年)は、中世荘園遺跡の考古学的検討にもとづいて中世の荘園経営を再考した業績であり、個人の仕事としては『中世須恵器の研究』(1994年)がもっとも顕著な業績となった。考古学の方法を堅持しながら、為政者の立場からのこされることの多い文献との接点を追究し、考古学からみた中世史像を描きだしたい、という吉岡さんの渾身の大作であった。中世史の脇田晴子さん(滋賀県立大学)は、この書を評したあと、「文献史学の中世史がもはや、考古学の成果を学ばずしては成り立ちえないことを確認」している。この大著が吉岡さんの博士論文(明治大学、1989年)となった。

歴博時代の吉岡さんは、ただひたすら研究に励んだ。論文は書けば大作になった。歴博での中・近世の陶磁器の収集には、特に熱心であった。

停年後の吉岡さんは郷里の金沢に帰り、あらためて、原点としての地域史を見直したい、という。また、地元の遺跡の整備事業や博物館運営を手伝い、地域に恩返しをしたい、とのことである。そういえば、歴博時代も石川考古学研究会の顧問を務めていた。吉岡さんの研究・社会活動は今後も倦むことなくつづくにちがいない。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)